

教育委員会会議の概要（令和8年6月定例会）

◆ 日 時 令和8年6月29日（月）午後2時00分から午後3時07分まで

◆ 場 所 教育局 第1会議室

◆ 出 席 者

教 育 長	天 野 元	出席
委員・教育長職務代理者	佐 藤 淳 一	出席
委 員	庄 司 弘 美	出席
委 員	長谷川 真里	欠席
委 員	永 富 良 一	出席
委 員	松 野 大 二 郎	出席
委 員	高 橋 知 子	出席

◆ 会議の概要

1 開 会

2 議事録の承認 6月臨時会

3 議事録署名委員の指名 永 富 委 員

4 報 告 事 項

（1）令和8年度仙台市標準学力検査及び仙台市生活・学習状況調査の結果概要について
（学びの連携推進室長 報告）

資料に基づき報告

永 富 委 員 学力検査の「活用」というのは、具体的にはどんな内容が問われるのか。

学びの連携推進室長 例えば、算数、数学などでいうと、単なる計算問題ではなく、文章題というか、何か問題場面の文章があって、学習している基礎的な内容を組み合わせて答えまで導くというような問題となっている。

永 富 委 員 ありがとうございます。これまで結果があまり高くなかったものが、だんだん高くなってきているというところが幾つかあるが、なぜこういうことが起きるのか。何か要因があるのか。

学びの連携推進室長 正答率が高くなってきているところについては、やはり現場の先生方が分かりやすい授業を日々積み重ねられて、また、単に授業だけではなく、こどもたちとの授業以外での関わりといったところも良好に努めているといったところが考えられる。

また、確かな学力研修委員会で、課題があるポイントについては、こんな授業をすると改善につながるのではないかというような事例を発信しており、そちらを見て勉

強していただいているといったことも関係が多少なりともあるかなと考えている。

永 富 委 員 もう一つ申し上げますと、今回、この検査結果あるいは調査結果について、目的自体が、「的確に把握し、指導に生かすとともに、個に応じたきめ細かな指導の充実を図る」ということで、ここから課題を抽出するというようなことを考えるのだろうが、恐らく、いずれもその結果に対して、なぜこうなったかというのは推測になってしまうと思う。そういう要因なども分析できるような構造というのが今後あると、せっかくこれだけの調査をずっとやってきているので、重要なのかなと思った。

学校ごとの差を直接比較すると、教員だったり、子どもたちだったり、いろいろなところに問題があるということを伝えてしまうことになりかねないが、そうしない形で要因を分析することも可能だと思う。ぜひそのような方向で検討していただければと思う。

学びの連携推進室長 ありがとうございます。分析を進めていきたいと思う。

教 育 長 永富委員のお話にあった個の分析の話と全体の分析の話の2つが根拠になっている。全体のほうは確かな学力研修委員会などで宮教大の先生と共にやる一方で、個のほうの分析やその手法については、どういうふうにされるのか。

学びの連携推進室長 児童生徒一人一人の指導については、学力検査で一人一人の状況が学校に結果として来るので、それを基にしながら、この子はこういったところが弱いというような部分を、先生方が丁寧に、個別にサポートしようなどというきっかけにこの調査はなっているのかなと考えている。

永 富 委 員 1人の子を追跡していったときに、点数が落ち込むようなことがあると思う。その場合、その弱点を補うということは、恐らくやられると思うが、ではなぜ落ち込むのかというような要因のほう分析できるようになるといいのではないか。その中で、共通の要因というものが出てくる可能性があるわけで、そういったものの把握には、もう少しデータを要因の観点で分析する、これは恐らく仮説を立てて調べていかなければいけないと思うが、そのようなことも検討されていけばいいのかなというふうには、実は何年か前から思っている。

学びの連携推進室長 ありがとうございます。

佐 藤 委 員 標準学力検査の仕方については、例年どおり、今年も方法等は変わりなくやってきているということではないか。

学びの連携推進室長 調査の方法ということでは、例年どおりとなっている。

佐 藤 委 員 今回、報告を聞いたときに驚いたのは、全て、「全体」も「基礎」も「活用」も同等以上になったという結果である。昨年は▼が4つほどあったが、こういう結果というのは、ここ数年、5年ぐらい遡るとどうなのか。

学びの連携推進室長 「全体」「基礎的知識」、それから「活用」と3つの分野で出しているが、「全体」だけの部分で見ていくと、ここ4、5年のところでは、その前に比べて5ポイントを超えて下回った教科数というのは減ってきている。

佐 藤 委 員 そういうふうには減少してきているということと、今回は全てないということは、私はすごい成果なのかなと思っている。また、標準学力検査において、同等以上の子どもたちが増えていく、もしくは5ポイントを超える下がないということは、すごく大きいことだと思う。そのことは、しっかりと評価すべきだと思う。成果というのは、ある程度謙虚にならなければならないというところもあるし、成果要因をしっかりと分析しなければならない部分もあると思うが、少なくともこの結果をしっかりと

と受け止めて、これはあくまでも子どもたちと先生方の考え、実践の積み重ねがここに数値として表れてきているものだと思うので、それが全ての学力を表しているわけではないが、少なくともその一部の結果として、これまでの経過から見て、少なくとも▼がなくなったという、この事実は、しっかり評価して学校に下ろしていくべきだと思うし、学校の先生方もきちんと頑張っていることを委員会としては認めてあげたい。また、子どもたちがそれにきちんと応えて成果を出しているということに対しては、しっかりと学校に対して、先生方に対して、子どもたちに対して評価してあげることが大切だとすごく思う。

学びの連携推進室長 ありがとうございます。

佐 藤 委 員 もう一つ、表の見方が曖昧で分からないというか、簡単に分かりやすく説明していただきたいところがある。9ページ、目標値の設定というのは、先ほどの成果との関係で、いかに妥当性とか精度を上げていくかということが毎年問われているところだと思うが、同等以上、これをできるだけ多くするというのを目的にやってきたかと思う。

例えば、小学校の社会、中学校の社会を見ると、小学校6年生のデータを見ていただきたいのだが、下から③、②、①と見ると、「活用」が64.3ポイント、「基礎的知識」が76.6ポイントというところからならしていくと、小学校6年生の「全体」は70.8ポイントというふうに出ていると思う。大体、こういうふうな傾向に出るのが一般的だと思う。結局、「活用」がやはり少なく、「基礎的知識」が多くて、そして、「全体」にするとその中間値ぐらいになっていくというか、どちらかに寄ると思う。

ところが、中学校1年生の社会を見ると、「活用」も「基礎的知識」も、どちらも6割を切っているにもかかわらず、「全体」が6割に届いている。「基礎」も「活用」も6割を切っているのに、「全体」だと6割を超えるという、その説明と、それから、隣の数学を見ると、今度は逆転している。「活用」が中学校1年生だと75.3ポイント、「基礎的知識」が73.4ポイントと高いのに、なぜか「全体」になると下がっている。普通、どちらも上がっていれば高くなると思うが、その点について教えていただきたい。

学びの連携推進室長 中学校1年生の社会の「基礎」と「活用」について、「全体」がなぜかそれよりも高いというのは珍しい状況なのだが、「基礎」と「活用」、目標値と同等というのが±5を含んでおり、その範囲に入ってくる児童生徒が、必ずしも「基礎」と「活用」で同じ、一致している状況ではないといった現象が起り得ることになる。例えば、「基礎」のほうでとても高い80ポイントを取っていて、ところが「活用」のほうではかなり低いだとか、あるいはどちらも目標値は超えていないのだけれども、大体そこに、平均的に「基礎」も「活用」も取っている、目標値と同等ぐらいを取っているとになったときに、やはり、総合的に「全体」で見れば、「全体」の目標値を超えていたというような子どもが入ってくる可能性があるわけで、どちらかということ、社会については目標値の同等の範囲に、もう少しで入ったのというような子が、「全体」で見たら、その目標値、同等以上のほうに入っていたというようなことから、このようなことが起きているのかなと思われる。

数学のほうでは、逆のような形で、「全体」のほうが低くなっているのかなと思われる。

佐 藤 委 員 幅があるので、上と下の関係で、それが数値として出るとこうなるということで理

解したが、目標値と同等以上のこどもの数なので、そういう押さえでいいのかなと思った。その子の一人一人の幅の振れというのもどちらかに入るので、要するに、同等以上になってしまうか、以下になってしまうかということなのだろうが、同等以上というのが±5という幅があるからということですね。

学びの連携推進室長 はい。±5で、－5よりも、実は－5.1だとか、もう少しで同等となる子が、要するに「基礎」も「活用」も同じぐらい惜しいところにいて、「全体」の目標値となると、どちらかという「基礎」寄りのポイントと近くはなっているので、あともう少しで目標値のゾーンに入ったのという子が、「基礎」も「活用」も大体平均して惜しいというところが、「全体」のところでは目標値のゾーンに入ってくるのかなと思う。

佐藤委員 ありがとうございます。

高橋委員 こちらの確かな学力、この仙台市の標準学力検査というものは、全国的にも同じような検査というのはされているのか。それと、順位がもしあるのであれば、仙台市の数字というのは、全国的に見たらどの位置にいるものなのか。

学びの連携推進室長 全国の他都市でも、各自治体独自にこういった学力検査をしているところはあるが、市だけでの比較、結果であり、全国と比べるとどうであるというところは明確にはない。

ただ、この問題自体は、全国の標準的な問題を全国でプレテストを行って作っている問題なので、全国区の標準的なレベルの問題というところで、これがつまり目標値を超えていれば、ある程度、全国の中でも決して悲観するものではないというか、そういった感じである。

高橋委員 市でいうとたくさん数があると思うが、政令指定都市の中ではどれぐらいなのかなとか、知ることができるといいかなと思った。

学びの連携推進室長 全国学力状況調査というものが同じ時期に、4月に全国で一斉に実施される。それは小学校6年生と中学校3年生のみだが、その中でいうと、仙台市についてはかなり高い結果、位置にいることは分かっている。例年そういう結果が出ている。

永富委員 先ほどの続きになるが、こちらの生活・学習状況調査というのは、こどもたちのある意味、意欲だったり、勉強する環境だったり、実際の実態だったり进行调查するのだが、その内容によって、それが非常に学力に影響しているということは、恐らく、分析可能だと思う。ただし、同じこどもたちのひもづいているデータがあればの話である。加齢医学研究所のほうで独自分析するというふうにおっしゃったが、どの程度の範囲のことを計画されているのか、もし分かるのであれば教えてほしい。

学びの連携推進室長 これまでだと、主に自己肯定感、「自分には、良いところがある」だとか、「認めてもらっている」などの項目が高い、良好なこどもについては、学力とも相関が見られるとか、あるいはスマホなどの端末の使用時間が、全く使わないというのもよくはないようだが、ただ使い過ぎると学力が伸び悩むというか、そういった相関が見られている。

昨年度については、親以外、家族以外の人からほめられている、多様な大人の相談する相手がいるだとか、そういったこどもについては、やはり学力のほうとの相関が見られている。

永富委員 今までも結果を拝見したことはあるが、相関というのは、実は多いほうがいいのか点数が高いほうがいいのかということが前提、あるいはスマホ時間であれば長いほうが悪いんだということが前提になっている。実際には、今お答えの中でおっしゃったよう

に、全く使わないのもこれはまた問題があるわけだが、そういう意味で、やはり、単にデータの相関というよりは、少し別な観点で解析をしたほうがいいなと思う。かつ、統計的に本当に差があるかどうかというのは、あまりちゃんと評価されていないような印象も持っている。

もう一つ大事なことは、結局、例えばスマホ時間と何とか、1つずつは対応して見ていると思うが、実際にはいろいろなものとの複合要因ということになる。例えば、「学校生活」についての配慮や「道徳心・挑戦・夢」、それぞれある程度調べてみると、恐らく、個性を大切にしている人は自己肯定感が高かったり、いろいろなお互いの関連があると思うので、そういう複合的な分析をしないと的確なことは言えないのかなと思っていた。ぜひそんなこともやっていただければと思う。

学びの連携推進室長 ありがとうございます。

佐 藤 委 員 今の続けてなのだが、かなりいろいろなデータをクロス分析したりとか、いろいろなデータ分析を科学的にやっていると思う。ただ、その出た結果をどういう生かすかだと思う。今、委員からも話があったように、私たちは3月にその結果が分かっているなくて、毎年毎年、この「学習意欲」の科学研究に関するプロジェクトからリーフレットが出る。それを、結果は分からないので、どんな分析をして、どのような結果が出て、それをどう次に反映させていくかということが見えていないので、こういう質問になるかと思う。毎回お聞きしていると思うが、その辺のことも具体的な話を示していただいたりとか、あとは、この膨大なデータ、これは物すごい科学的分析というのは、非常に有効な説得力を持つ。本市ならではの、今は5万ぐらいだが、前は8万ぐらいのデータがあって、それで毎年の経年をはかっていって、定点の全部データがあるわけなので、これはすごく有効なデータになるので、ぜひそれをうまく活用して、さらに子どもたちの学習意欲に対してだけではなく、生活全てにおいて、学習と学力との関係を見ていくといいのかなと思っている。

学びの連携推進室長 ありがとうございます。

松 野 委 員 昨年も伺ったかもしれないが、表の見方を教えていただきたい。例えば、19ページの42番の今年のプロジェクト、小学5年生だけがくんと下がっているイメージがある。これは昨年の場合だと4年生のデータになるということなのか。昨年の5年生を、毎年の5年生を追いかけているわけではなくて、スライドしていっているというイメージでいいか。

学びの連携推進室長 赤は今年度の5年生で、青は昨年度の5年生ということになる。

松 野 委 員 そうすると、例えばこの42番や、22ページの52番だと、小学校4年生や5年生だけ毎年がくんと下がっているのは、何かの事情であったり、例えば進級の時期とかで中1で下がるとかだと分かたりするのだが、何かがあってこの部分だけ下がっていたのかなと。昨年も伺ったような気がするが、分かっていたら教えていただきたい。

学びの連携推進室長 原因については不明なところである。探ってまいりたい。

松 野 委 員 22ページの52番も同じということか。

学びの連携推進室長 こちらについても原因を探ってまいりたい。

庄 司 委 員 「家庭生活」のところで、43番の「朝食を食べずに登校する日がある」ということで、令和4年から4年間ぐらい数値も出ているが、年々上がっているということが非常に気になる。特に、小学校2年生が高いなと感じていて、こういった調査をして、何らかの形で対策というか、何かやっていることが実際にあるのかどうか、何もやら

なかったら、また次の年はどんどん上がっていくのかなという感じで少し結果が怖いような気がするが、何かやっていたりするのかな。

学びの連携推進室長 こちらについては、「朝食を食べずに」といったところ、あとは寝る時間が遅くなっているといったような全ての項目について、各学校の状況の結果が、学校に行っているの、学校のほうでこういったところが心配だといったところを、家庭におたより等でお知らせなどして協力を仰いでいくというか、そういう形になっているところである。

永 富 委 員 先ほどの「活用」と「基礎」との乖離みたいな、乖離のあるお子さんもいればないお子さんもいると思う。それ自体も、私たちはアウトカムと言うのだが、それ自体にどんな要因が関係しているかということも分析可能だと思う。そんなことも見られるといいのかなと思った。もちろん、この調査に入っていない項目は要因として評価することはできないが、もし、ある程度、皆さんがこういうことが要因になっているのではないかと思うことがあれば、それは調査に今後含めていくというような方向で考えていいのかなと思った。

こういう経年でやっている調査というのは、なかなか項目を変えると前との比較ができないということになると思うが、雪だるまにならない程度に、ある程度入替えをしてやってみるという、そのためにも要因分析をやってみることが大切になってくるのかなと思う。

学びの連携推進室長 ありがとうございます。

高 橋 委 員 25ページの67番の「家の人以外に相談できる大人がいる」という質問に対して、小5から中3まで数字が上がっていつているのは、これはいいことなのか。そして、これからもっとこれが増えていくのか、それをいいということで捉えるのか、この質問で子どもたちのどういう背景を見ようとしているのか伺いたい。

学びの連携推進室長 こちらの「家の人以外に相談できる大人がいる」、信頼できる大人がいるというのはいいことだというふうに捉えている。今後もさらに、実はなかなか信頼関係というものは短期間ではできないものなので、大きな伸びはすぐには表れないとは思いますが、上昇していけばいいなと思っている。また、そういった子どもの学力や学校生活の面など、こちらが高いと良好なほうに行くのかなというふうに考えている。

松 野 委 員 今の67番だが、これは設問の中で、例えば「対面で」とか「SNS上で」とか、そういう縛りを設けたりはしていないのか。

学びの連携推進室長 縛りは入っていない。

松 野 委 員 そうすると、必ずしも相談できる人は地域の人とは限らないという形になると。

学びの連携推進室長 そうなる。

松 野 委 員 分かった。実際、地域でいうと、例えば児童生徒から「こうなんだよ」とかという話が来たりすると、すごくうれしいなと思う反面、こういう年代の子を抱えている親からすると、地域ではないところ、また全く知らない人だと、親もその相談している内容を把握することができないとなると、必ずしもこれが上がり続けていいものなのかという疑問は少しある。

学びの連携推進室長 そういった心配の要素も踏まえて、この質問の仕方について検討してみたいと思う。

田 中 副 教 育 長 今の67番について少し補足すると、どちらかというと、調査の狙いとしては、家族に相談できない子が増えているのではないかというようなネガティブなことを問おうとしているということよりも、むしろ地域とのつながりとか大人とのつながりとい

う意味で、コミュニケーション能力とかあるいはそういう人たちが地域や自分の身近ににいるということが、例えば、生活上、学習上、どういう影響があるかというところを一つ分析するポイントとして設問として入れているという背景もあるので、先ほど数値が上がることはいいと考えているというお答えの一つの意味としては、やはりそういうコミュニケーションの取れる地域性だったり、あるいは自分の周りにそういう大人がいるということは子どもにとってはプラスに働く要素があるよねという意味合いにおけるもの。一方で、家族に相談できずに家族以外の人に相談することに、そういうネガティブなほうにつながるのではないかというご懸念も、この数字だけ見るとそういう部分もあると思うが、質問あるいは調査の趣旨としては、どちらかというところネガティブなほうよりはポジティブに子どもたちがどういうふうに関わっているか、大人と関わっているか。なので、設問上もその方法とかあるいは地域の人というふうに限ったものではないので、ここで言っている家族、家の人以外にということこの範囲は、かなり広いというふうに考えている。

5 付 議 事 項

第 11 号議案 教育委員会公告式規則の一部改正について

(総務課長 説明)

資料に基づき説明

原案のとおり決定

第 12 号議案 行政手続法に基づく仙台市教育委員会聴聞及び弁明の機会の付与に関する規則の一部改正について

(総務課長 説明)

資料に基づき説明

原案のとおり決定

第 13 号議案 仙台市行政手続条例に基づく仙台市教育委員会聴聞及び弁明の機会の付与に関する規則の一部改正について

(総務課長 説明)

資料に基づき説明

原案のとおり決定

第 14 号議案 仙台市教育委員会会計年度任用職員の給与に関する規程の一部改正について

(人事課長 説明)

資料に基づき説明

原案のとおり決定

